優秀賞

# 幸せの種をまいて

福島県　矢祭町立矢祭小学校六年　髙信　治仁

「ピーナッツの黄色い花は、幸せの黄色い花って言うんだよ。」

初夏の朝に葉っぱの下にかくれてひっそりと咲く黄色の小さなちょうちょうみたいな花は、昼にはしぼんでしまう。だから、朝にピーナッツの畑に行かないと見ることができないから、見つけた人はラッキーということで「幸せの黄色い花」って言うのかもしれない。

ぼくは、母と姉と今年の春にピーナッツの種まき体験をした。姉もぼくも、正直言って種まき体験などやる気はなかったが、母に言われ、無理矢理行くことになった。

ピーナッツ畑のある場所は堤防沿いにあり、川からのさわやかな優しい風が喜多方の大地を吹き抜けていって、とても気持ちがよかった。そこは、何度も川がはんらんした場所で、土がさらさらで、ピーナッツに最高の土らしい。そのサラサラの土のせいで、全員土まみれになった。

「服は汚れるし、つまらないし、帰りたい。」

姉とそんな話をしながら種まきをしていると、

「おいしくなあれと唱えながらまいてください。そうすれば、必ず秋にはおいしいピーナッツができますよ。」

というスタッフさんの声が聞こえてきた。

「そんなわけないけど、やってみようか。」

と笑いながら言う姉につられて、

「おいしくなあれ。おいしくなあれ。」

と一粒一粒種をまいた。ふと気が付くと、参加している人たちの「おいしくなあれ」の魔法の声が広い畑のあちこちから聞こえてきた。そして、みんな笑顔で種をまいているのが分かった。

「私が穴をあけるから、治仁は種をまいてね。ママは、その上から土をかけて。」

姉の指示通り、母と三人で種をまいた。もうぼくたちの息の合った種まきを止められる人はいないくらい、軽快だった。汗をかいて顔まで土だらけになっている姉に大笑い。ずっとかがんでいたので、立ち上がった拍子に転んでしまった母を見て大笑い。

あれ、ぼくはこの種まきに乗り気ではなかったはず。いつの間にかとても楽しく、平和で幸せな時間に変わっていた。最近は、コロナがあったり、姉が下宿生活をしていたり、兄が受験生だったりして家族で何かを体験することができなかったが、この貴重な体験で家族の絆が深まった気がする。

秋には、ピーナッツの収穫がある。土の布団にねかせていたピーナッツの赤ちゃんたちはどのくらい成長しているのだろう。今頃きっと、ぼくたちが言っていた魔法の言葉を思い出しながら、必死に成長していることだろう。

もしかしたら、見れたらラッキーな花だから幸せの黄色い花なのではなく、仲よく種をまいたり、おいしいピーナッツを食べたりして笑顔になるから幸せの黄色い花なのかも。